

都市農村交流活動による中山間地域振興の実現可能性

Feasibility of Regional Improvement through Urban-Rural Exchanges in Hilled Rural Areas

○ 小島好視*, 角道弘文**

○ Yoshimi KOJIMA*, Hirofumi KAKUDO**

1. 研究の背景と目的

近年、中山間地域では、高齢化の進行等による過疎化、後継者不足が著しく、それに伴う集落機能の低下や耕作放棄地の増加が問題視されている。今後も地元住民だけでそれらを保全していくことは困難であり、何らかの外部からの支援が必要であろう。

一方、都市住民にとって農村での交流は、豊かな自然やそこで実際に生活している人と触れ合える機会であり、癒し効果のある余暇活動としてみなされている。

以上のことより、今後、地域振興のための一手段として、地元住民が都市農村交流を選択するならば、都市住民から支援を得たい具体的内容を明らかにするとともに、活動を行っていく中で地域への愛着やアピールポイントを再確認していくことが重要である。

本研究では、都市農村交流活動を行っていくにあたって、中山間地域の住民自身の都市農村交流に対する意識や活動に対する意向を明らかにし、都市農村交流の実現可能性について検討を行うことを目的とする。

2. 調査地の概要

3ヶ所の中山間地域(香川県三木町小叢地区、さぬき市前山地区、東かがわ市五名地区)を選定した。小叢地区は、67世帯、約170人、前山地区は、約130世帯、約270人、五名地区は、約130世帯、約340人となっている。

各地区には、目的に違いはあるが、地域振興に資すると考えられる組織(小叢地区:山南営農組合、前山地区:前山をよくする会、五名地

区:五名活性化委員会)を有しており、都市住民も含めた域外者との交流活動が行われている。小叢地区は、農産物のブランド化や町営キャンプ場を利用したイベントなど、前山地区は、四国八十八箇所巡りの結願寺である大窪寺への順路であることを意識したイベントなど、五名地区は、「五名ふるさとの家」を核とした手作り品の展示・販売などが行われている。

3. 調査方法

住民意識を把握するため、「都市農村交流による地域振興への期待」、都市住民との交流を前提としたとき「都市住民に対して発信できる地区の魅力」、「交流を通じて、支援を受けたい具体的内容」、「交流の際、障害となる事項」に関して、5段階評価で回答を求めた。

アンケートは、2007年1月下旬に小叢地区(回収率100%、有効回答49部)、同年2月上旬に前山地区(回収率82%、有効回答107部)、五名地区(回収率86%、有効回答52部)で行った。

4. 結果と考察

4. 1 都市農村交流による地域振興への期待

地域振興のため、都市住民と交流することによってどの程度期待しているかについてみると、小叢地区62%、五名地区が60%であったのに対し、前山地区は33%にとどまった。前山地区では、域外者が投棄するごみ等の問題が顕在化しており、域外者が通行立ち寄りにより、地区の生活環境が悪化する場合もあることを経験的に認識しており、このことが都市住民との交流を積極的に考えがたい結果を引き起こした

* 香川大学大学院, Graduate School, Kagawa-Univ.

** 香川大学工学部, Faculty of Engineering, Kagawa Univ.

ものと考えられる。

都市住民との交流を通じて、支援を得たい具体的内容(図1)をみると、本来、地区ぐるみで行う、ため池や水路などの土地改良施設の保全・管理よりも、耕作放棄地やあぜみちなど、より生産現場に密着したものに対する支援が、3地区共通して求められていることがわかる。また、具体的な支援活動は明確でないが、猪・猿対策への支援も求められている。小蓑地区と五名地区についてみると、「他の都市住民への宣伝」や「地元の農産物・加工品・工芸品の購入」への支援が強く望まれていることがわかる。これは、この2地区がこれまで行ってきた都市農村交流活動の実績を踏まえて、今後も更なる発展を望んでいる意向と考えられる。

4. 2都市住民に発信できる地区の魅力

交流活動を行う際、都市住民に対して、発信できる魅力をどのように認識しているのか(図2)についてみると、有効な地域資源を住民が十分認識しきれていないことが読み取れた。例

えば、小蓑地区における現地調査、ヒアリング調査によると、小蓑川の水辺での親水活動、熊野神社を拠点とした社寺巡りなどが期待される。これらは都市交流にとっての有効な地域資源となり得るといえるが、地域住民の評価は低かった。

このことから、都市交流に対する機運を地区全体として高める前に、都市交流の有効性・地域振興の実現可能性などについて、営農組合内で議論する必要がある。そのためには、例えば、集落単位で環境点検を行うことも有効であろう。都市住民の目線を加えて環境点検を行うことにより、住民にとっては見慣れた風景でも、都市住民の目線では優れた景観である場合がある。また、調査段階より都市住民が関与していることから、実現性の高い都市農村交流事業を展開する契機となろう。

《謝辞》 本研究を行うに当たって、香川県農政水産部農村整備課ならびに各地区住民の方々にご協力を頂いた。記して、感謝の意を表します。

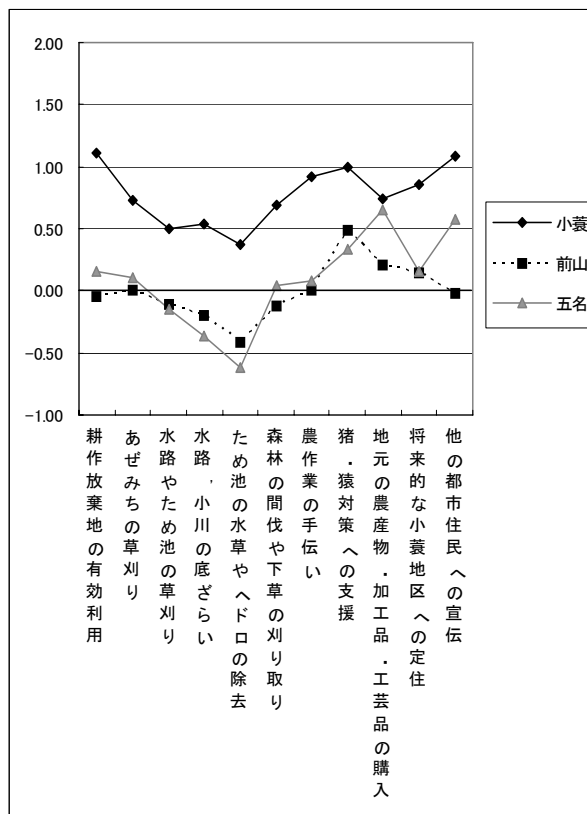


図1 都市住民に対して、支援を得たい具体的内容

Fig.1 Expectations to Town Residents

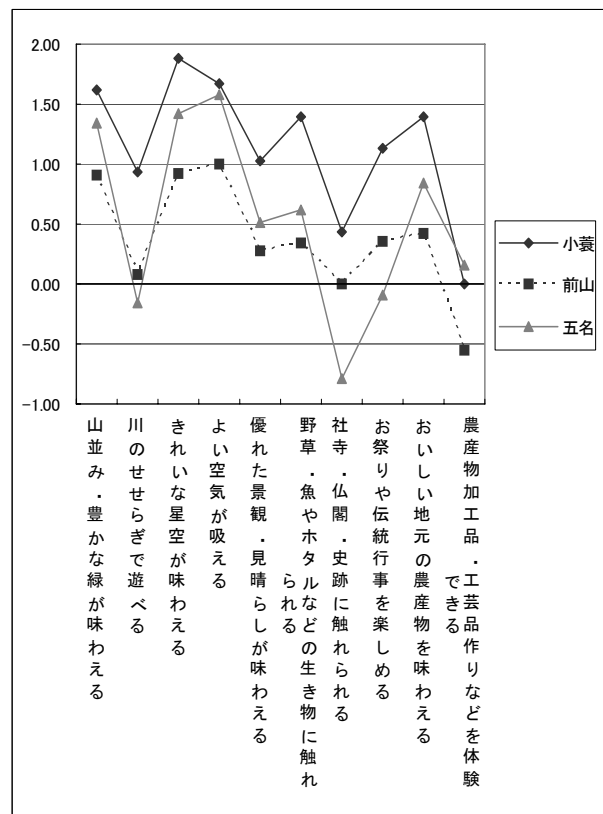


図2 都市住民に対して提供できる魅力

Fig.2 Resources to offer for Town Residents